

HOPES

ホープス セカンド
2nd

原発事故の影響による村内の作付け制限が解除され、実に7年ぶりとなる田植えが、5月10日、須萱地区で行われました。制限解除後初めての田植えを行ったのは、高橋松一さん。補助事業を活用して購入した新しい田植え機に乗り、県が開発したうるち米「里山のつぶ」の種もみを直播しました。昨年度は、実証作付けにも参加し、その手応え

6年前の村に戻りたい

高橋松一さん
(二枚橋・須萱)



避難後、村の公用バスの運転手を務めてきた高橋さん。地区の農業復興組合で行う保全活動などにも、率先して関わってきました。



須萱地区で行われた、制限解除後初めての田植えの様子です。新しい田植え機を巧みに転回させながら、作業を見守る関係者に笑顔を見せる高橋さん。

をもって、出荷する食用米の作付けを始めることにしたのです。「やっぱり田植え機に乗るのはいいなあ。本当に気持ちがいい」と笑顔を見せました。

高橋さんは、避難先で介護サービスなどを利用している家族のことを考えて、リフォームした自宅には戻らず、しばらくは避難先から通って、水田の管理を行います。「朝早く来るんだよ。やるのがたくさんあるからね」。

公用バスでは、おどけた会話で乗客を笑わせることが得意な高橋さんですが、ふるさとの再生には人一倍真剣な思いを持っています。「震災前は牛も飼っていた。避難のために手放す時の、牛たちのあのみじめな姿を思い出すと、俺はもう飼えないかな」と思う。だけど米づくりは、震災前の村に二歩でも戻りたいという気持ちでやるんだ。飯館の米はおいしいねと言ってもらえるよう、時間をかけて土地を戻していくよ」。

＜編集後記＞

●「土地を耕すことは、詩を書くのと同じくらい尊い」とアメリカの教育者は言ったそうです。5月、新緑あふれる村内で待ち望んでいた田植えがはじまりました。農家の皆さんは、「やっと、農業ができる」「土地をほたらかしには出来ないよ」と決意を含んだ笑顔を見せてくれます。「静かに田んぼやっから、取材に来るなよ笑」とも言われますが、いやいや、村広報にも微力ながら役を担わせてくださいます。(木幡)

●お店の人とお客様、支援に来てくださる人と応援を受け取る人：今月もいろいろな出会いの場面におじゃまさせていただきます。お聞きしてみても初めて分かることは、心の中で、深くうなずいたり、すごくうれしくなったり、泣きたくなるほど感動したり…。いろいろなことを教えていただける、広報の役得ですね。(星)



飯館村は「日本で最も美しい村」連合に加盟しています。